

# 沖縄における方言札の効果

——<sup>くにがみ きん</sup>沖縄県国頭郡金武町N地区を対象としたケーススタディ——

仲 嶺 政 光

富山大学

Effect of Hougen-Fuda in OKINAWA:

A case study of N Field in Kin Town, Kunigami County, Okinawa Pref.

Masamitsu Nakamine

University of Toyama

日本生活指導学会

The Japan Association for the Study of Guidance

# 沖縄における方言札の効果

——沖縄県<sup>くにがみ</sup>国頭郡<sup>きん</sup>金武町N地区を対象としたケーススタディ——

富山大学 仲 嶺 政 光

Effect of Hougen-Fuda in OKINAWA:  
A case study of N Field in Kin Town, Kunigami County, Okinawa Pref.

Masamitsu Nakamine  
University of Toyama

## 1. 研究課題と研究視角

沖縄ではかつて、方言札と呼ばれるものが存在していた。それは文字どおり「方言札」と書かれた札であり、「標準語励行の強行手段として沖縄各地の学校で用いられた罰札」である。方言を使った生徒にその札を渡し、「これを持った者は、方言を話している他の生徒を見つけて手渡していくという決まり」の下で使われた（沖縄タイムス社 1983：444）。

沖縄方言を標準語化させることは琉球処分以後一貫した政策課題であった。当初は沖縄方言と標準語を対訳するかたちの教育方法がとられたものの、方言を用いた授業を否定する言説が1900年代前半に登場してくる。そして方言札は、それとほぼ時を同じくして出現するようになった（近藤編 2008：29-38）。同時代における方言札普及の背景には、近代国家が不可避的に持つ言語の統一へ向けての同化圧力があり、「『標準語選定』という言語規範の確立」という動きもあった（イ 1996：144）。そのことに加え、移民・出稼ぎ先での言語・風俗的な不自由・差別を避けたいという地域の側の切実な要求によりこれが受容されたという事情があった（近藤 2006：209-210）。その後「沖縄復帰運動の柱」とされた沖縄教職員会は、その運動をバックにしながらか「児童に『日本人』としての自覚を育成することと、標準語（共通語）の励行」を積極的に推進していったとされ（小熊 1998：564）、方言札は戦後においてもある時期まで用い続けられた。

方言札は、標準語の普及浸透を通じて近現代社会

における一つの生き方を押しつけようとするものであり、それにふさわしからぬ伝統的な諸慣行刷新の目論見を体現している。本稿の課題は、方言札によりもたらされた効果とはどのようなものであったのか、いかにしてその政策意図である言語の統一が進む過程に寄与していたのかを検討することにある。以下分析を進める際、方言札により標準語化を推し進める動きに対して、方言そのものの運用はどのような変化をたどったのか、という両面的構図を念頭に置くことにする。

方言札の効果について、先行研究では二つの対照的な側面が明らかにされている。一方で、学校記念誌における方言札の記述を調査した近藤健一郎は、「方言札の導入は沖縄言葉を話さず標準語を話させることにつながった」（近藤 2004：71、傍線引用者、以下の傍点・傍線についても同様）と述べている。これは、方言札の政策意図が首尾よく貫徹された局面を指摘するものである。他方、方言札の意図からすればやや意外な事実であるが、方言札体験者に対するインタビュー調査をおこなった志村文隆は、方言札は子どもたちの間に様々なトラブルを発生させた一方で、「楽しく、遊び感覚」（志村 2006：20）、「ゲーム感覚でみんな楽しんでやっていた」（志村 2008：36）など、子どもたちの間にもたらされたゲーム的效果を強調している。同様の評価は、井谷泰彦の「体罰を伴った札の使用例がある一方で、ゲーム感覚で使った体験談がある」（井谷 2006：40）という指摘にも表れているところで

ある<sup>1)</sup>。同じ井谷は、方言札と地域の伝統的な罰札制度との関連性、そして沖縄の人々のアイデンティティのあり方の関連性について分析し、方言札は「他律的 identity の象徴」「自文化を否定し、自分たちの存在を他文化・他言語へと仮託するという近代沖縄社会の在り方の象徴」であったとも主張している(井谷 2006: 86)。

これらの先行研究は、(1) 方言札を用いた標準語化を推進する側の意図がどう実現しているか、(2) 方言札の運用を体験した側はそれをどう読み変えているか、という観点から、方言札の効果についてそれぞれ重要な知見を提示している。これを受けて本稿は以下、沖縄のある特定地域に焦点を定め、方言札消滅に至るまでの長期間の様子を、当該地域での言語使用の実態と関連させながら描いていく。すでに「沖縄全体としてみれば、1900年代前半以降のあらゆる時期に方言札が存在していた」(近藤 2004: 65) ことが明らかになっている。従って今後は、地域を特定したケーススタディにより詳細な分析がなされる段階にある。「ある地域や島に視点をずえることも必要となる」(近藤 2004: 74)、「特定地域の言語生活史における方言札使用の特徴・影響も併せて研究課題としたい」(志村 2008: 40)、このように先行研究の中で示唆されてきたが未開拓の研究領域に、本稿は迫っていきたい。

本研究が対象とした沖縄のある特定地域とは、沖縄県国頭郡金武町N地区である。ここをフィールドとし、当該地域で生まれ育った方々を対象にインタビュー調査をおこなった。調査対象者の選定は筆者の知人や教育関係者などの紹介による。第1回調査は2013年12月30日～2014年1月2日、第2回調査は2014年3月2日～3月6日、第3回調査は2014年6月14日～6月17日、第4回調査は2014年8月10日～8月15日におこなった。調査対象者は合計29名になる。インタビューを開始する前に「方言や方言札のことについて研究をしています」というふうに調査についての説明をおこなった。また、必要に応じ筆者の経歴などの出自情報を明らかにした上でインタビューを実施した。調査項目は①就学前に用いていた言語、②方言使用の世代的な変化、③方言札など学校での方言禁止の有無、④方言札への対応の仕方、⑤方言札に標準語教育の効果があったか、などである。以下の証言記録中、〔 〕

は筆者が補った部分である。また、話者の証言をそっくり引用する際には文頭に▲をつけた。

N地区方言は、隣接の他市村を含めどの地域においても会話が通じ合えないほどの個性があり、「随分違った表現の仕方がある」(岡村 1994)。このため、N地区は言語をめぐる懸隔が際だって強く、標準語のみならず一般的な沖縄方言とも意思疎通が難しいという「方言内方言」とでもいうべき特徴がある。「〔高校卒業後〕那覇に行って。例えば職場とかいくでしょ。共通語がうまく言えないもんでね。高校卒業しても。高校でも同じ金武ちゅ〔人〕としか話さないもんで。〔隣接する〕宜野座んちゅとはなかなか方言が通じないから」、「例えば、石川とかコザ、那覇あたりというのは、方言の共通語みたいなものがあるでしょ。どこでも沖縄だったら通じるという。だけどね、金武の方言だけはどこでも通じない」<sup>2)</sup>。この地域は言語的な適応過程に独特の難しさがあったことを感じさせる。

N地区方言は隣接する金武町K地区方言とほとんど同じだが、両者には単語や抑揚に「微妙な違い」がある。例えば「K地区の方言は強く、N地区の方言はやわらかい」<sup>3)</sup> という対比的な評がある。N地区・K地区とも金武小学校の校区にあたる。

## 2. 方言の使用をめぐる世代的推移

まず、N地区での方言の使用実態とその変化をここで概観する。表1は、調査対象者の生年、方言札体験の有無とその導入学年、伝統的なコミュニケーションの諸能力、および就学前に用いていた言語が何であったか、について聞き取った結果を示したものである。このうち伝統的なコミュニケーションにはそれぞれ次のような意味合いがある。①敬い言葉は目上に対する言葉遣いであり、方言による異世代間コミュニケーションの基礎をなし、垂直的な関係性を築くものである。②屋号とは家々の名であり、共同体メンバーの居住地や親族関係を相互に確認しあうものであり、水平的な関係性を認識するものである。③K地区との言葉の差異への認識はムラの境界感覚があることを示している。

以下では調査対象者の世代区分を試みる。まず第I世代は、部分的にせよすべてが戦前期の学校制度を体験しており、下の世代よりも方言に堪能である。第I世代は、自分よりも上の世代の言葉をそのまま

【表 1】

世代	生年	記号*1	方言札	方言札の導入学年	敬い言葉	屋号	K地区との差異	就学前の使用言語
I	1921	I -1M	○	3～4年	○	○	○	標準語*2
	1922	I -2F	○	2～3年	○	○	○	方言
	1926	I -3M	○	6年	○	○	○	方言
	1927	I -4M	○	2年	○	○	○	方言
	1930	I -5M	○	3年	○	○	○	方言
	1930	I -6F	○	3年	○	○	○	方言
	1930	I -7F	○	3年	○	○	○	方言
	1934	I -8F	○	1年	○	○	○	方言
	1935	I -9F	○	中学校	○	○	×	方言
	1935	I -10F	○	5～6年	○	○	○	方言
1938	I -11M	○	中学校	○	○	○	方言	
II	1941	II -1M	○	3～4年	×	○	×	方言
	1944	II -2M	○	4～5年	○	○	○	方言
	1947	II -3M	○	中学校	×	×	○	方言
	1947	II -4F	○	低学年	×	×	×	方言
	1948	II -5M	○	4～5年	○	○	○	混交
	1949	II -6M	○	3～4年	○	×	○	方言
	1952	II -7M	○	3～4年	×	×	○	混交
	1953	II -8M	○	1年	○	×	×	方言
	1954	II -9F	×	-	×	×	×	方言
	1957	II -10M	×	-	×	×	○	標準語
	1958	II -11M	×	-	×	×	○	方言
	1958	II -12M	×	-	×	×	×	方言
	1958	II -13M	×	-	×	×	○	混交
	1958	II -14M	×	-	×	×	×	方言
III	1967	III -1F	×	-	×	○*5	○	標準語
	1967	III -2M	×	-	×	×	×	標準語
	1967	III -3M	×	-	×	×	×	標準語
	1968	III -4M	×	-	×	×	○	標準語

\*1 記号は、世代 - 通し番号 (年齢の高い順) を表し、末尾に性別 (M = 男性 / F = 女性) を付した。

\*2 幼少時移民先で標準語を用いていたため、引き揚げ後方言を覚える。

\*3 I -1M ~ I -11M までが戦前期の学校に就学している。

\*4 II -8M ~ II -9F で金武小学校の方言札が消滅したと推定される。

\*5 職業の関係で覚えたものとされる。

継承している、と述べる方が多かった。「(上の世代と比べて自分たちのしゃべり方は変わったなあと思うことありますか?) 変わっていないと思うけどね。私たちの代まではね」(I -10F)。

これに対し 1941 ~ 1958 年生の第 II 世代は過渡的な様相がある。この世代は第 I 世代と同じく就学前に方言を用いていた者も多く、同世代間で方言を聞き / 話すことができるものの、敬い言葉の継承が不完全である。また、屋号でその家のメンバーを想起できる者も少ない。なお、この第 II 世代の中で方言札が消滅している。

▲ [幼少期の] 遊びの段階の方言がそのまま。ちゃんとした言葉、敬い言葉ができないから [目上の人とは]

自然と標準語でしか話さない。(II -4F)。

▲ [上の世代と比べて] マンチャー [混交] になっているね。昔とか、例えば急須とかさ、ヤックワンとか言うんだけど、おっかーのときはもっと [別の] 言い方があったみたいよ (II -6M)。

▲ 年配者からね、「いったー敬い言葉もわからんさやー」ということでおしかりを受けるもんだから、逆に方言使わなくなってしまうわけよ。難しい。敬語というのは一番難しい (II -7M)。

▲ しょっちゅう注意されていた。……きちんと敬語使わないっておばーに言われた記憶が。……いっぱい指導された記憶があるけど、まだ身になっていないというの? (II -9F)。

▲ おばーにああいう [敬い] 言葉できないんだったら、しゃ

べるなって言われた。年下だったらいいけど年上に敬えなかったら、共通語の方がまだいいからって言われた。おばーに<sup>4)</sup>。

▲(敬い言葉があると思いますが。) 全く分からない。教えてもらわなかった (II -11M)。

その後1967～1968年生の第Ⅲ世代以降になると状況は一変して就学前の言語はすべて標準語となり、以後一部に例外はあるが在学中は基本的に方言が話せない<sup>5)</sup>。従って学校内での方言禁止ということもすでになくなっている。

方言がうつろう様を次のように述べる方々がいた。「(方言が話せるのはどの世代までですか?) 50代からは何とか。40代はちょこっと。……聞けるのが40代でしゃべれるのが50代だな」(II -5M)、「(何歳ぐらいまで方言がしゃべれますか) 50ぐらい [1963年生] までじゃないかな」(II -1M)、「5～6歳下 [1963～1964年生] までは方言ができる」(II -14M)。このように、方言が話せるかどうかということで第Ⅱ世代と第Ⅲ世代の間に溝があるといえよう。

N地区とK地区との言語的差異についてみると、第Ⅱ～Ⅲ世代にかけて一定程度これを認識できると述べた者がいるものの、実際の言語運用ではかなり縮小の傾向にあると言われる。

▲年寄りには [違いが] ハッキリします。今の若いのはみんな同じ。もう全然ない (I -4M)。

▲ [N地区・K地区方言] 変わらないです。今は (I -5M)。

▲今の40代50代60代というのはもう、[N地区・K地区方言の] 差はないですよ (I -11M)。

### 3. 方言札の効果の局所性と限界

方言札は方言の禁止と標準語励行の両面を担ったものと考えられているが、ここではいったん両者を区別して考えたい。冒頭に掲げた定義のごとく、方言札は方言を用いた子どもたちの間で札をまわしあう制度であり、その場では方言を禁じる効果が発揮されるものの、標準語の恒常的実践ということにまでは直結していないからである。「標準語励行というものもあったよ。標準語を使いましょうということ。それと並行してやっていたんじゃないかな。方

言札というのは」(II -1M)。

以下に方言の日常的な使用状況とともに、方言札の効果についてたずねた結果をみてみよう。

▲帰ってきたらすぐもう方言で。学校出ると同時に。……(方言札というのは、共通語を使う効果というはありましたかね。) 段々年齢がかさむに従って、3年4年5年とって次第に言葉が大きく広がっていく……(学校の中では。) 運動場なんかで知らんふりして [方言を] 片一方でやるぐらいで (I -4M)。

▲うちに帰ったら共通語は使わなかった。……(共通語を話すために方言札は役に立ちましたかね。) 多分、きっと学校内では気をつけて標準語を励行するあれば身についていたはず。(態度みたいなもの。) そうね。そういうことだね。心得みたいなものね (I -8F)。

▲普段はもう全部方言だけでも、札持っている人が近くと、話しくなる。ははは。……(方言札というのは、共通語の学習の意味はありましたかね。) でしょうね。ほんとの、出した側の、ようするに学校側のねらいはそれだと思います (I -11M)。

▲(お父さんお母さんとかは標準語でしゃべらなかつたんですか?) 全然。(学校にあがっても。) はい。もう方言で。……(方言札は、共通語覚えるのに役に立ったと思いますか?) 僕は立ったと思うね。できたらもう、[札を] もらいたくないからね。だけどもう放課後になると遊ぶためには方言しか使えないからね。そっちで一人標準語使うというのはできないわけよ (II -1M)。

▲(小学校に入る前はどんな言葉を。) みんな方言ですよ。……(方言札なんですけど、共通語を勉強するのに役に立ったと思いますか?) まあ、なつただろうね。強制的に日本語を教えるわけだから。方言を使うないうことを徹底的にさせるわけだから。日本語、標準語を使うためには、まあ、よかつたんじゃないかなあと思いはするけど (II -7M)。

▲(学校の外では。) [方言を] 普通にしゃべっていた。……(方言札っていうのは、共通語を使うということに、効果はありましたかね。) 要するにもう、方言から共通語に切り替えていくのかな。本も、日本語も意味わからんさーね。方言だけしゃべっていたら (II -8M)。

上記のように、方言札に何らかの効果があつたことを示す回答がある。方言の禁止、標準語励行の心得、言葉の広がり・切り替え、方言札をもらいたく

ない、などの例が見受けられる。ただ、これらの回答は、方言の禁止が学校内の一部分に限られており、生活語としての方言がなお健在であった、ということもあわせて述べられている。学校の外部・内部(ただし教師や方言札と距離のある場所で)において自らが方言の話者でありえたという回答があることとあわせて考えると、方言札の効果が及ぶ範囲が局所的であったことが確認できる。加えて、次のように方言札の限界を指摘する回答もみられた。

- ▲ (共通語を覚えるのに、方言札は役に立ちましたかね。) 強いて、札があるからといって普通語を覚えようというあれはなかったと思うんだがね。(標準語はどこまでできるようになりましたか?) 学校を通じて。それが一番であった。授業で。先生が言うのを聞いて。ただ〔標準語を話すための〕特別な授業というのはなかったはずね。自然に〔わかるようになった〕(I -3M)。
- ▲ (方言札は共通語を教える効果はあったんですかね。) いやー、そんなに関係しなかったんじゃないですか。もううちではしょっちゅう方言だから (I -5M)。
- ▲ (方言札は、共通語覚えるのに効果ありましたか?) ドウクワカラシ [よくわからない]。ワッター中学校卒業するまで友だち同士標準語スカンタンド〔使わなかったよ〕(I -9F)。
- ▲ (方言札は、共通語を使うのに有効な方法でしたか?) 有効な方法というのかなあ。それしか考えられなかったのかな。ただね、一つ言えるのは、この方言札がでたおかげでね、逆に話が少なくなったかも知れない。お互い同士の。だって、話をするとに方言はボンボンでるわけだから。有効な手段と言えたかどうかというのはねえ。ちょっと疑問なところがある (II -3M)。
- ▲ (方言札というのは、共通語を覚えるのに効果はあったんですかね。) 僕は別にないと思うね。方言札とっても、何も、ただ札だけかけられて、何をするとか、何も無いのに。ただ札かけられて終わりだのに。ただ黙らすだけ。方言札あつたから、共通語話すかというとなかなかやらんよね。もう黙っておくだけ。先生がいるところでは。……(標準語を覚えたのは。) 社会人になって、就職してからだね (II -6M)。

方言札の渡し合いをめぐるのせめぎ合いは、教師による言語的統制の強い授業時ではなく、主に休み時間にほぼ限定的に展開されていた。「質問も

できないわけよね。何か聞こうと思っても」(II -2M)、「授業中にもうしゃべらないわけさ。かわいそうなくらいしゃべらないわけ。会話しなくなるわけ」(II -5M)。「先生がいなければ普通に〔方言を〕しゃべっていた。授業時間だけは、共通語を使いましょうという感じだな。あとは休み時間とかみんな、普通の会話が方言だから」(II -8M)、「方言札を持っている者は、次に渡すべく方言を使う獲物をねらって、必死に休み時間中奔走するのです」(近藤 2000: 49)。これに対し、教師たちのあいだでも、方言札があまりよい方法ではなかったという声が戦前・戦後とも存在したことが指摘されている。『方言札』が沖縄社会に出現した最初の時期から、あまり適切な方法とは言えないらしいことを沖縄の教育者自身が自覚していた節がある」(井谷 2006: 22)、「大衆の前で辱かして方言使用を禁止し共通語使用を奨励する……教育的によい方法ではない」(沖縄教職員会 1958=2001: 69-70)。以上のことから、方言札は、それ単独では標準語の実践を導く力に限界を持つものであり、その政策意図はストレートに実現するにはいたらなかったのではないかと考えられる。

#### 4. 方言札の「制度化された抜け道」

- ▲ もうその当時、共通語で話しようとしたら、「格好つけて」っていう感じさ。格好つけて、とか、ディキヤーフナー〔デキるふり〕して、とかいうのがある (II -3M)。
- ▲ 子どもの頃共通語しかしゃべらない奴は、別の人間な感じで仲間に入れないような感じで見られていたわけね。……もうなんていうのかな。共通語でしゃべる奴は、弱い奴というふうにみられる傾向があった (II -13M)。

「威勢のいい方言」(ウィリス 1996: 87) は学校への対抗文化と親和的である。とはいえ、方言札が一つの制度として沖縄の学校に広く行き渡り定着していった以上は、子どもたちはその制度の存在自体を何らかの形で受け入れざるを得ない。ここでは、方言札をめぐる効果、すなわち「多様性」(志村 2008: 36)、あるいは「多様な対応」(近藤 2004: 71) とも言われた効果の数々には制度論的にどんな意味があったのかを分析する。

方言札は、日常の言語的慣習と標準語導入との間に明確な葛藤・対立関係を樹立させるものである。そのため両者の溝を埋め、葛藤・対立関係を解消する「制度的規則の制度化された抜け道」(R. マートン)の働きが活性化することになる。マートンは次のように述べる。「新しく制定された法規範と地方の習律との間に大きな食い違いが生ずるときには、規範の全拘束力を回避するためにありとあらゆる手段が講ぜられる。破棄、策謀、言いがれ、黙過、法律上の擬制などである」(マートン 1969: 455)。以下に方言札の「抜け道」に相当する局面についてみてみよう。

①多くが方言に馴染み、はじめて標準語に接する新一年生への配慮、すなわち「方言マンチャー〔混交〕」の授業 (I -5M) や、ほとんどが中・高学年以降になってから方言札が導入されていた事実 (表1参照)<sup>6)</sup>。「(もう小学校あがったときから〔方言札は〕ありました?) ううん。なかった。その時〔1年生の時〕みんな方言だから、渡ししようがない。みんなとってしまうから。ははは。だからやっ普通語になったのが3年生4年生だから、だいたい4年、5年ぐらいから方言札が出てきた」(II -5M)。

②学校内であっても方言を公然と用いる方法があること。「方言で言ったらばね」などという前置きをつけると、学校内であっても方言を話すことができること (近藤 1998: 45、志村 2008: 37)、あるいは教師や方言札の所持者附近以外の安全地帯では方言で話していたこと。「先生が目の前にいない場合は〔学校内であっても〕お互い方言ですから」(I -1M)、「札がないってわかったらムル〔すべて〕方言、標準語ステクスウラントド〔使う人はいなかったよ〕」(I -9F)。

③方言札のゲーム的展開、あるいは子どもどうしの人間関係の論理が入り込むこと。「〔方言札を〕渡しやすい人と渡しにくい人〔がいた〕。同じ同期生でもあったような気がするな。(渡しにくい人とは、例えば腕白ものとか。) そうそう。ケンカの強い人」(II -1M)。あるいは「堅苦しい札の渡しあいじゃなくて、イタズラ半分で方言使わせて喜びながら一緒に掃除する格好だね。……強制とは言っても、普段の友だちだから、一緒に掃除だとって」(I -4M)、「男が持つとね、女性の方にまわらないのよね。……だいたい小学校の4、5年なっても女の子

とは話しなかったんですよ。」(II -1M) など。

以上のように方言札は、その導入者である学校・教師側の意図とは別に、子どもたちの間では外在的な制度として存在し続けていたようにみえる。つまり子どもらは方言札の「抜け道」を通じて言語をめぐる葛藤・対立を乗り越えていたと考えられるのである。

## 5. 2つの言語教育の併存

田中克彦によれば、「言語〔ex. 日本語：引用者〕とは、それを構成するさまざまな諸方言をまとめて、その上に超越的に君臨する一種の超方言とする考え方である」とされる (田中 1981: 19)。実際、かつての方言はきわめて多彩なところがあった。例えば町外他地域の方言との差異、N地区・K地区の差異、敬い言葉、あるいは「独特の女用語」(I -5M)、「他の町村と違うんですね。金武の言葉がこう、他シマ〔地域〕ではこう。それとね、女性の言葉と、男がいう言葉と、若干違うみたい。方言でもね」(II -1M) など。このような言語的多彩さを強引に捨象・単純化して運用しようとする方言札は、方言 vs 標準語という二項対立にまとめあげ、両者の「綱引き」のような言語観を成立させ広めていく。インタビューでは、かつては方言への隠然とした求心力が存在し、そのため子どもたちのあいだで試行錯誤があったことがうかがえた。

- ▲〔移民先から引き揚げ後〕だんだん〔方言に〕慣れました。慣れないとね。まわりみんな方言ですからね。……方言ができないとすぐ注意されましたよ。……なるべく方言しなさいって言われましたよ (I -1M)。
- ▲小さい頃から方言だけしか聞いていないから、共通語を使うときには恥ずかしくて。……だから、小学校2年生のときには、方言を使う人はお掃除当番をやるんだということで、もう、あきらめていつも掃除。……先生と話をするときには、はいとかいいえとか、というような程度しか返事もしない。考え方を言葉にして言いかけることは絶対にはできない (I -4M)。
- ▲〔(就学前) おうちとかでは方言。) いやいや、もう、その当時は共通語を使う習慣というのはまず全くないと言っている。……本当に自分が思っていることを〔標準語で〕言えるっていうふうになったのは高校に入ってからぐらいだから (II -3M)。

▲共通語使いなさいと言うのはね、小学校3年ごろからかな。……先生の前では黙っておくわけ。共通語出来ないから。……先生のまねして、あっちが話しかけたら、考えながら言うわけ。普通語ではどんないうのかなと。チャーシアビルハナイガ【どう話せばいいか】（II-6M）。

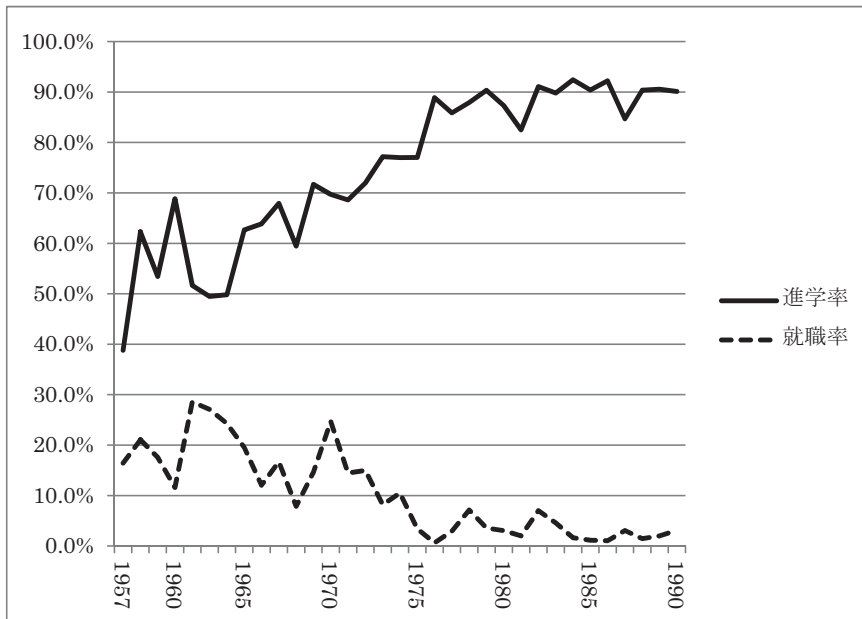
これらの子ども側の様子を見ると、方言札の存在は、「他律的アイデンティティ」の象徴とまでは言い切れないが、二つの言語が対立的な併存状態を維持し、方言 vs 標準語という二項対立のもとで二つのアイデンティティが拮抗し続けた時代の象徴であった、とみることができよう。

## 6. 方言札消滅期周辺の地域社会的状況

先にみた制度の「抜け道」は、標準語といういわば「王道」が存在しているということを前提として機能するものである。ここでは、人々が標準語へと接近していく地域社会的状況について考える。学校における方言札の消滅は、人々の言語生活における何らかの変容を反映するものだったと推測される。表1をみると、第II世代のうち1960年に金武小学校に入学したII-8M、II-9Fのあたりで方言札が消

滅したようにみえる（二重線\*4で示した）。一方金武中学校では「昭和37〔1962〕年ごろまではありましたね……昭和40〔1965〕年以降は、もう方言は使うなといっても、自然と周囲が共通語使っている」（I-4M）と把握されていた。ここでは1960～1965年ごろを方言札消滅期と推定し、その状況を追ってみたい。この時期、金武中学校からの高校進学率は1960～1970年代にかけて上昇していることがうかがえる（図1）。そして、地域の生活環境も大きく変化していた。「昭和三十六〔1961〕年から電灯の設備が出来、翌年から水道の給水もはじまり、四十〔1965〕年頃からガス、テレビ、それに三種の神器といわれた自家用車、冷蔵庫、洗濯機等も普及し始め、一般住民はこの〔戦後〕二十年間に原始生活から、高度の文化生活を享受することが出来た」（金武町誌編纂委員会1983：623）。「方言から共通語に変わった大きな要因というのが、テレビとかの普及じゃないのかなあとはいはするね。……テレビとかラジオとかなんかを見たり聴いたりしているうちに、共通語で子どもたちに接するようになってから、だいぶ変わったのかな。もうとにかく、年寄りが方言を使わなくなった」（II-3M）。

このような文化的・物質的近代化のなかで、閉鎖



【図1】金武中学校卒業者の進学率・就職率の推移（1957～1990）

※『学校基本調査報告書』沖縄県版各年度より作成。



的な核家族——三世同居家族が方言の再生産に結びつきやすいとされるのに対し——が形成される基礎的な条件も整ってきた、と考えられる。方言札の消滅期と重なる同時代は高度成長の訪れに対する期待も大きかっただろう。「(高校に行かなくちゃ、というのがありましたか?)あの頃は、農業とか、厳しいから、貧困だと。(農業、貧困。)公務員というのは給料が安いものでね。例えば軍作業とか、こういったね、まあ給料もよくて、なんかおいしいものを食べるという感じだったね。仕事やっておいしいものを食べたいとか。まずは会社に勤めたい、高校卒業して会社員になりたい」<sup>7)</sup>。第Ⅱ世代において、家業の継承が当たり前ではない生き方の選択が可能な時代(いわゆる「金の卵」時代)が到来しつつあったことが確認できる。以下、子育てをめぐる、方言から標準語への移行についてみる。

- ▲方言自体をしゃべらなくなったのはいつ頃からかね。多分さ、東京オリンピック(1964)。あの頃からが非常に大きく変わったのよね。あの当時からテレビもみんな標準語さーね(I-8F)。
- ▲おば一達とはみんな方言でしゃべるけど、子どもたちとは共通語。……子育て(1958年生)するころからはもう標準語になっていたね(I-6F)。
- ▲(標準語は)自然に[覚えた]。子どもたち(1963/1965年生)が学校に出るようになったら、ウリタータウン話、方言チャーツウジランクトウヨ[通じないから]、あれだちと一緒に[自分も]標準語覚えたかも知れないよ。子どもたちと。もうあれたちは標準語さ(I-9F)。
- ▲その頃[1965年ごろ]からは、年寄りまで少しずつ。うちの母なんかも、もう共通語使っておったからね。孫には(I-4M)。

## 7. 個人化された方言の再生産

方言札消滅以後、標準語励行は『週訓』という形で生き残った(井谷2006:160)とされる。「物心ついてからは方言札はなかった。ただ、黒板に『方言は使いません』と飾られていた」(Ⅱ-12M)。このことは、裏を返せば、方言札の消滅以後も盛んに方言を話す者が存在した時期があり(Ⅱ9F～Ⅱ14M)、ある種のタイムラグがあったことを示している。方言札消滅以後、「小学校4年ぐらいだっ

たかな、学校で方言禁止になってねえ。それで、方言喋ったらビンタされよった。先生に。その頃、厳しかったねえ。だけど、学校以外ではいつも方言使っていたから。友だちどうしは。学校終わったら。……学校入るまでは共通語わからなかったはずよ。家族もみんな方言だったから。あの頃は」(Ⅱ-11M)。

しかしその一方で変化は着実に進んでいた。1960～1965年ごろ、ちょうど方言札が消滅したと思われる時期以後の学校には、子育ての言語の変化を背景にして、就学期において方言しか話せない者ばかりでなく、ある程度標準語も話せる者、あるいは方言を話せない者も徐々に増えてくる。そうした変化の中で先述した方言vs標準語の綱引きは瓦解しはじめ、以下のように方言を話すことの意味は地域社会の文脈から乖離し、より家族化ないし個人化された方言の学習・運用の様を呈していくことになる。

- ▲[方言が廃れたのは]学校教育がもともといけなかったと思うよ。方言は、うちの時代までは「方言は使わないようにしましょう」という教育受けてるから。……家庭で[方言を]しゃべれた時代の人にはしゃべれる。で、わったー[俺たちの]時代はもう、しゃべれる人としゃべれない人がいる。わったー時代からね(Ⅱ-12M)。
- ▲多分、俺ら方言だけだよ。要するに、友だちつくるための一つ的手段だったんであって。方言がしゃべれない奴は友だちにならないという感覚の時代で育っているんだよ。だから外で覚えてくるわけね、方言。家の中じゃなくて。……例えば井戸にスンジャっていうんだけど、金武の方言で。スンジャって言葉が子どもがしゃべれば、ああ、すげえ、すげえなあ、ていうふうに見られるという感じだよ(Ⅱ-13M)。

振り返ると、かつての方言は地域社会との深いつながりがあった。「農家の子どもたちはみんな方言好きだから、言葉、行事みんな方言」(Ⅱ-5M)、「漁業の人も、もう方言とは縁の深い仕事ですね。漁業の人たちは陰暦を非常に重視するわけよね。あいうのは、沖縄の年中行事と関係するわけよ。で、年中行事というのはほとんど方言と関わる」(Ⅱ-11M)。しかし第Ⅰ世代に該当する「戦前、小学校の四、五年にもなって敬語ができなかったり、言葉

を遣い誤ったりすると親や回りの人から厳しい注意があった」(岡村 1994) というのもすでに過去のものだ。第Ⅱ世代後半以後、方言札消滅以後の方言は、地域社会や家族の支えの中で自然に授かるものから、個人的努力によって模倣・学習し体得するものへと変化していく。「(若い人はどうやって方言を学んでいるんですかね。) だいたい、先輩たちとの交わりだと思います。で、よく先輩たちとつき合っている若い人たちね。そういう人たちは方言うまいですよ。で、つき合いのない若い人たちは方言知らない……若い人の〔話を〕聞いていると、中には方言で素晴らしいなど。それで、習いたいなーという若い人もいますね」(Ⅰ-5M)。

就学前、標準語から出発した第Ⅲ世代になると、方言学習における個人化が一層進んでくる。

▲全部方言でしゃべる人がいて、すごいこの人って、昔から、ちっちゃい頃から思ったことがあったんで、こんなにしゃべれたらいいな、っていう、何か憧れでもないけど、それを目指していたんだけど、あの年を越えてもやっぱりしゃべれませぬね (Ⅲ-1F)。

▲シージャ〔年上の人〕がうらやましい。方言漫才 見ているみたいで、何でも〔方言で〕言い合えてうらやましい (Ⅲ-3M)。

## 8. 結論

「子どもながらに何でかねえというのがありましたね。何で札があるのかなあとって。(先生に聞いてみたりすることは。) いや、ないです。もう昔は先生怖いですからね。先生には何も言えない」(Ⅰ-5M)。このような素朴な疑問／洞察は方言札制にひそむ恣意性を暴露する可能性を秘めたものであるが、長く教育的権威(ブルデュー 1991: 26-27) の力で押さえ込まれてきた。

以下、金武町N地区におけるインタビュー調査によって明らかになったことを述べる。まず第一に、方言札の登場は、授業時に加え休み時間までも方言を禁じることを意味するものだが、先行研究が既に明らかにしている通り、この執拗なまでの措置は子どもらを沈黙へと導く効果を発揮するものだったことが再確認された。しかし第二に、地域社会に深く根づいていたN地区方言は、方言札の導入によって容易に標準語化されたわけではなかった。そこに

は、方言を伝達するローカルで伝統的な人間形成の力によって両言語が対立的に併存する状況がうみだされていた。方言は、ある時期まで子どもたちを惹きつける魅力や権威を持って存在し再生産され、方言札の「抜け道」の働きも展開されるに至った。そのような二言語併存の状況は少なくとも方言札消滅期と推定される 1960～1965 年以降しばらくの間にまでわたって続いていたと考えられる。第三に、N地区における伝統的なコミュニケーションが第Ⅱ世代において衰退し、その後人々の標準語への接近が高度成長期の諸変化とちょうど重なる形で進んでいく。さらに、生活語がほぼ標準語化された第Ⅲ世代にあっては、方言札やその後継である標準語励行の「週訓」がすでに学校から退場し、二言語間の対立構図は解消されることになっていった。

最後に、方言札のゲーム的展開について検討を加えたい。まず確認しておかなくてはならないことは、方言札とは方言禁止を旨とした強制的な全員参加の営みである、という事実である。よって、方言札のゲーム的展開は、ある種子どもたちによる消極的抵抗の側面だったとも解されよう。方言札が十分にゲームとして展開するには、子どもの自発的な遊びとは異なり、方言しか話せない子が多い状況が必要とする。ゲームとしての方言札は、札の回しあいにおける不確実性に依拠しながら子ども集団全体を惹きつけ、夢中にさせ、高い集中力を喚起させる、それら自体も重要な局面だということになる。ゲームの山場は、衆人環視のもとでの方言札所持者の交代劇にあり、そこで一つの節目がつくりだされ、運用が再開・継続されていく。「これ〔方言札〕は隠れては渡せないから。人の前で渡さんと認められないから。(1対1では成り立たない。) 人の目の前で渡さんと成立するもんじゃないから」(Ⅱ-5M)。しかし方言札の消滅期附近になると、次のようなゲームの山場を全く欠いた重大な秩序破壊の事例も見られるようになる。「充分に共通語のわからない児、生いきな児は朝で〔朝の早い段階で〕札を取ってしまい、一日中他人に渡さないで自由平気で方言を使うものが出た(方言札は方言許可証になる)」(沖縄教職員会 1958=2001: 69)。このように、時代が下り標準語がある層に一定程度定着し、一部の子どものみが方言だけを話す過渡期的状況になってくると、方言札の流通範囲と不確実性が著しく縮小する

ことになり、罰のもつ見せしめの意味が重すぎることになってしまうため、ゲームとしての面白みが減退することになる。ゲームの面白さには、それにふさわしい賞罰の範囲というものがあるとされる(ゴッフマン1985:64-67)。地域における本格的な標準語の普及浸透の過程にあってその姿を消した方言札は、従前のゲーム的效果を生み出す基盤も失っていたことになるのである。

### 【注】

- 1) 学校・教師側主導で導入され、強制参加で運用された方言札をゲームであると定義づける際にはいくぶん慎重な説明が必要かも知れない。カイヨワによる遊びの第一の定義では、「自由な活動。すなわち、遊戯者が強制されないこと。」(カイヨワ1990:40)があげられている。
- 2) 1997年8月30日に実施した予備的なインタビューの記録より(現在第Ⅱ世代男性)。
- 3) K地区住民の方談:2014年6月16日。
- 4) 1997年8月25日に実施した予備的なインタビューの記録より(現在第Ⅱ世代女性)。
- 5) ただし学卒後は方言が話せる／話せないに分岐する。なお、現在における方言振興の取り組みとして金武町におけるしまくとうば大会、N地区での方言収録委員会の活動がある。
- 6) このような方言札導入学年の多様さは、個々の担任にその判断が委ねられていたためであると考えられる。「[腕白ものが] どんどん方言使って、担任の先生に聞かれたらゴツとやられて。特に担任ですな。他の先生はあまり、知らんぶりかな。ある程度は」(I-1M)。
- 7) 1997年8月30日に実施した予備的なインタビューの記録より(現在第Ⅱ世代男性)。

### 【参考文献】

- ブルデュー・ピエール(1991)〔宮島喬訳〕『再生産——教育・社会・文化』藤原書店
- カイヨワ・ロジェ(1990)〔多田道太郎・塚崎幹夫訳〕『遊びと人間』講談社学術文庫
- ゴッフマン・アーヴィング(1985)〔佐藤毅・折橋徹彦訳〕『出会い』誠信書房
- 井谷泰彦(2006)『沖縄の方言札』ボーダーインク
- イ・ヨンスク(1996)『「国語」という思想』岩波書

- 店
- 近藤健一郎(1998)「沖縄における方言札(1)——八重山地域の学校記念誌を資料として——」『愛知県立大学文学部論集』(児童教育学科編)47号
- (2000)「沖縄における方言札(3)——沖縄島周辺の島々の学校記念誌を資料として——」『愛知県立大学文学部論集』(児童教育学科編)49号
- (2004)「学校記念誌にみる近代沖縄における方言札」『南島史学』63号
- (2006)『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会
- 編(2008)「近代沖縄における方言札の出現」『方言札 ことばと身体』社会評論社
- マートン・ロバート(1969)〔森東吾・森好夫・金沢実訳〕『社会理論と機能分析』青木書店
- 岡村トヨ(1994)「金武の方言について」『金武くとうば』私家本
- 沖縄教職員会(1958)「第四回教育研究大会研究録(国語)」『沖縄教育』第6号(「資料集」『EDGE』12号、2001年、APO所収より)
- 沖縄タイムス社(1983)『沖縄大百科事典』下
- 小熊英二(1998)『<日本人>の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社
- 志村文隆(2006)「沖縄における方言札——体験者への聞き取り調査から——」『宮城学院女子大学研究論文集』102号
- (2008)「方言札の使用形態——沖縄本島における体験者世代への調査から——」『宮城学院女子大学研究論文集』107号
- 田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波新書
- ウィリス・ポール(1996)〔熊沢誠・山田潤訳〕『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗 労働への順応』ちくま学芸文庫